

台湾における「日本文化論」に見られる 対日觀*

黃 智 慧
(中央研究院民族学研究所)

Views of Japan as Reflected in Taiwanese Writings on Nihon Bunkaron

HUANG, Chih-huei
Academia Sinica, Institute of Ethnology

In the field of Japan studies, the great number of works related to Nihon bunkaron is a publishing phenomenon not to be overlooked.

In these numerous writings on Nihon bunkaron, especially those authored by foreign writers, social scientists can often discern the views and feelings about Japan prevalent in the various countries in which these works are produced. This paper attempts to examine the case of Taiwan.

Of the relevant Taiwanese publications on Nihon bunkaron between 1947 and 2003 examined by this study, four categories can be established: (1) general discourse on culture; (2) Nihon bunkaron contained in autobiography / biography / poetry; (3) Nihon bunkaron presented as an aspect of Japanese-Taiwanese relations; and (4) discourse on popular culture. Through detailed analysis, this study identifies four major characteristics in the Nihon bunkaron of post-war Taiwan:

(1) In the post-colonial period, there have been two co-existing but mutually incompatible views of Japan in Taiwan: one presented from the perspective of the invaded people and the other from that of the people who were colonized. The former view has been more permissible in the political climate of Taiwan; indeed, it has gained official approval and has long been the hegemonic view of Japan. During the 38 years martial law, it was the dominant voice in the media and publications; even after the ending of martial law, it continued to exert a strong countervailing

Keywords: Nihonjinron, view of Japan by the invaded people, view of Japan by the people who were colonized, popular culture, postcolonial situation

キーワード: 日本人論, 侵略される側の対日觀, 植民される側の対日觀, 流行文化, ポストコロニアル状況

* 本研究は住友財団 2000 年度「アジア諸国の日本関連研究助成」を受けて可能となったものである。初稿（中国語版）は、台湾中央研究院『亜太研究論壇』26: 94-118 (2004/12) に掲載された。本稿はそれを元に新たに加筆修正を加えたものである。また 2005 年 6 月に日本台湾学会にて報告し、貴重なコメントをいただいた。ここで併せて深謝の意を表したい。

force to the view of Japan as seen by the colonized. The view of Japan from the perspective of the invaded people is predicated on two basic tenets: that there can be no co-existence with Japan because of the war experience, and that Japanese culture originated from China. As a result of the countercheck and interference by this view of Japan, examination of and reflection on the colonial experience by Taiwan's colonized has failed to progress in a subjectively informed manner.

(2) The Nihon bunkaron offered by the colonized of Taiwan has long been unable to gain access to Chinese publications; it was only after the 1990s that a significant number of these works began to be presented in Japanese. This sudden outburst of voice after half a century of silence is surely a unique phenomenon never encountered in other colonized areas of the world. These writings expressing the view of Japan by the colonized present a very broad variety of attitudes, fluctuating between the two extremes of total hatred toward Japan and unqualified approval of Japanese rule.

(3) How has Taiwan been engaged in re-learning about Japan some fifty long years after the end of colonialism? This is not only an issue relevant to the task of consensus building within Taiwan itself, it is also important with regard to the future development of the relationship between Japan and Taiwan. Writers expressing the view of Japan from the stance of the colonized are doing so in their capacity as former colonial subjects; in consequence, they are especially knowledgeable about Japanese culture and are in a unique position to offer critiques and comments on Japanese society.

(4) Since the 1990s there has also been a prevailing discourse on Japan-influenced popular culture, or the so-called Japan mania. This is, for one thing, an indication of the affinity for Japanese culture; for another, it is also a prompt and initial recognition of Japan's domination in Asia's globalization or its cultural hegemony. Such recognition also provides a model for Taiwan's attempt at exporting its own popular culture to other Asian regions. This type of discourse on Japan mania, however, has completely evaded the question of assessing colonial rule, with the result that the affection for Japanese popular culture has gradually turned a new page in Taiwan's relationship with Japan.

はじめに

1. 「日本文化論」の選択基準と文献の種類
2. 文献(1)：広汎なる「文化論」
3. 文献(2)：自伝／伝記／詩集から見る「文化論」

はじめに

日本研究の領域において、大量に出版される「日本文化論」という書籍出版物の存在

4. 文献(3)：日台関係を主軸とした「文化論」

5. 文献(4)：流行文化論

むすびに：台湾におけるポストコロニアル期の対日観

は、無視できない現象である。「日本文化論」は内容によって「日本人論」或いは「日本論」とも称されている¹⁾。日本における「日本文化論」関連出版物をカウントして見た場合、戦後より20世紀末までに、優に2,000種以上

の出版物があるとの統計が出ている²⁾。また出版の時期を考察してみると、「日本文化論」は戦後初めて出版されたというわけではなく、明治維新以来百年あまりの時間を経て蓄積されてきた領域である。このような膨大な出版数と時を経た「日本文化論」は、もはや単純に過熱した出版現象ではなく、それを産出した地域が織りなした特殊な社会文化現象と見るべきであり、すでに社会科学の視点から優れた研究がなされてきた³⁾。

これら大量の「日本文化論」に関連する著作物は、大きく分けて日本人作者によって書かれた物、また外国人作者によって書かれた物と2種類に分けることができる。したがって、日本人作者によってのみ「日本文化論」が生み出されるというわけではなく、また、日本人読者のみが「日本文化論」を消費するという事でもない。更には、外国人作者が国外にて記した「日本文化論」が、日本人作者が記した論述以上に、日本社会で多く引用され、重視されていることさえある。絶好の例としては、米国の人類学者であるルース・ベネディクトの著作『菊と刀』は、戦後の「日本文化論」を語る上で、ある種のパラダイムとなり、この本が下地となり、多くの「文化論」に関する討論が行われた。今日までに同書は、日本国内にて既に100万冊以上の売り上げたと言われる⁴⁾。これらの外国人によって記された「日本文化論」は、外国においてもベストセラーとしてランキング入りすることもあり、1975年に米国にて出版された

『SHOGUN』(James Clavell) は、わずか5年内に米国内で七百万冊を売り上げた⁵⁾という。また、韓国においても、日本に関する書籍が常に売り上げの上位に入っているが、それらは国民感情を煽る代表作とみなされることもある⁶⁾。社会科学者は、往々にしてこれら外国で生まれた「日本文化論」に関連する著作中より、その国の社会の大衆の対日姿勢、ひいては「日本観」或いは「対日観」を読みとるのである。

いわば日本国内における「日本文化論」の生産と消費は、日本社会を観察するための絶好の素材であるのみならず、国外においても生産され消費されているため、それが一種の国民感情を照らし出す鏡の役割を果たし、国民の対日観を映し出し、時にはその国と日本の間に大きな影響を及ぼすことさえある。

外国人作者によって描かれた「日本文化論」について、佐伯彰一はかつて1858年から1984年の間に日本にて翻訳出版された42冊の書籍を引用紹介している。その大部分が、欧米作家の著作であり、中国語の書籍は、わずか3冊に過ぎない。その3冊とは、黄尊憲の『日本雑事詩』(1879)、戴季陶の『日本論』(1928)、周作人の『日本管窓』(1935-1937)と全て戦前の中国人による著作のみであった。このほか、村上勝敏がかつて収録した1945年より1996年における、日本で翻訳出版された68冊の「日本文化論」に関連する出版物は、主に日本の経済発展と国際関係を主体とした書籍であった⁷⁾。これらの

- 1) 大まかに言うと、社会文化に比重をおく論述は「日本文化論」と称され、民族・社会心理・生物学に比重をおいた論述については、「日本人論」が用いられることが多い。また、政治外交及び経済貿易に関する論述に際しては、「日本論」として論じられる場合が多い。3者を広義の解釈より鑑みた場合、各自が他の2者を包含することもあり得る。
- 2) 出版数のカウントについて、青木保(1990: 24)参照。なお、戦前の出版数統計については、明確な数字は出ていない。
- 3) ハルミ・ペフ 1987、青木保 1990、南博 1994、吉野耕作 1997を参照。
- 4) 1948年に日本で翻訳された後、1988年まで80回の再版を重ね、売り上げは100万冊を超えた。青木保 1990: 31。
- 5) ジョンソン 1986: 161。
- 6) 崔吉城 2002: 46。
- 7) 戦後日本において翻訳された外国人の記した日本論著作は合計68冊。村上勝敏 1997: 19-22。

外国人による著作は、米国人が圧倒的多数を占め、次に欧州系と続き、唯一アジア人の手によって記された書籍は、韓国の李御寧著『縮み志向の日本人』のみであった。しかしながら、中国語によって記された著作は、1冊もノミネートされることはなかった。これは、台湾人作家のみならず、中国や東南アジアに住む華僑による著作もしかりである。つまり、戦後の中国語著作物における「日本文化論」は、日本においてあまり言及されてこなかったのである。出版物が少なすぎたのか、或いは質の問題であったのか、それとも、他の要因があったのか、検討する余地があるだろうが、本論は台湾の「日本文化論」にのみ注目していきたい。

ところで台湾にはどれほどの「日本文化論」に関する著作物があるのだろうか？台湾人によって記された「日本文化論」はどのような解説が可能であろうか？これは台湾において日本研究に従事する全ての者が突き当たる問題でもある。しかしながら目下、この方面的の討論はほぼ空白のままで今日に至っている⁸⁾。日台間における過去100年以上にわたる密接な関係から鑑みると、台湾は戦後「日本文化論」を生み出す条件を満たしていないわけではない。1895年から1945年までの植民統治期間を経て、日本は台湾で日本語と日本文化の普及に全力を尽くした。終戦を迎える前、国民学校の就学率は、台湾の全人口の6割以上となっていた。言わば、戦後の台湾は膨大な日本語を理解する人口を有し、これを土台として「日本文化論」を展開し得る十分な条件があるはずであった。にもかかわらず、戦後台湾で生まれた「日本文化論」は、日本ではほとんど言及されていない現実がある。

本文の目的は、この空白となっている箇所を埋めることにある。方法としては、戦後台

湾における出版物中の「日本文化論」に関する書籍を全面的に調べ、作品内容と作者の発言ポジションを考察する以外に他に近道はない。そこから戦後の台湾における「日本文化論」の特色を探り、さらにポストコロニアル期における台湾特有の対日観に焦点を絞り討論したい。

1. 「日本文化論」の選択基準と文献の種類

いわゆる「日本文化論」の定義は時代、学科及び検討の角度に照らし合わせたとき、若干の差異が生じる。社会心理学者である南博は、日本の国民性に関する論著を「日本人論」と称した。文化人類学者の青木保は、日本文化論を一種の特定な言説とし、これらの言説が社会に対し一定の影響力を持つと主張する。戦前の「日本文化論」の主体が美学、文学、哲学などの人文領域であったのに対し、戦後は大幅に方向転換し社会科学的探求が主流となる⁹⁾。それは社会学や心理学、文化人類学のみにより生じたわけではなく、たとえば、杉本良夫が「日本文化論」の作者の出身背景を分析したところ、風土学、民俗学、農村社会学、市民社会論、近代化理論、経営学、未来学、産業者科学など様々であることが判明したという¹⁰⁾。また村上勝敏の収録した外国人作者による「日本文化論」は、社会科学のほか、大部分は企業経営、経済学或いは、政治学者及びマスメディアの記者であるという。これら作者の専門領域より鑑みても、「日本文化論」は極めて広範囲な領域よりアプローチされており、角度を変えて見れば、違った様相を呈することがありうるのである。

本論文に収録した「日本文化論」は、基本的に日本の社会、人文或いは広義においての文化面を観察した出版物を対象とするが、特

8) 大陸の中国人の日本論について述べたのは黄福慶 1980, 林明德 1980 がある。

9) 大久保喬樹 2003: 207, 南博 1994, 青木保 1990。

10) 杉本良夫・ロス マオア 1992:118-119。

定の学科に限定されるわけではない。ペフ・ハルミは「文化論」について更に細かく 13 の特徴を挙げている。

- (1) 「文化論」は、ある文化を共有する集団が自己集団から他者を区別する手段である。
- (2) 自己の集団の持つ、文化的、社会的特徴を論じたもの。
- (3) 自己の集団を他の集団から区別するために、両者の差異を特に強調するためのもの。
- (4) 他集団と自己の集団とは何らかの利害関係を持つ。
- (5) 「文化論」でとり挙げられる、集団の特徴は単純化されることが多い。
- (6) その特徴は統計的根拠を持つとは限らない。
- (7) 「文化論」でとり挙げられられる要因は伝統的なものに見出されることが多い。
- (8) 「文化論」は特徴を誇張するくらいがある。
- (9) 一つの「文化論」の中ではしばしば相矛盾する現象を含むが、それを説明することができない。
- (10) 「文化論」はある特徴があたかもその文化の担い手全員に等しく当てはまるかの如く主張する。
- (11) 「文化論」には文化が均質的であるといういう前提が隠されている。
- (12) 「文化論」には価値観が伴う。
- (13) 「文化論」には自己民族中心主義の傾向がある。

上述した「文化論」に対する批判的理解の

特徴は、全てが台湾において生まれる「日本文化論」の条件とは一致するとは限らないが、本文で取り扱う「日本文化論」に関する文献収録と内容を論じる上で参考となり、また指標となることは間違いない。

以下、戦後の台湾における「日本文化論」に関する文献の選択基準を設定する。まず、第 1 の基準として、テーマと内容が上述の「文化論」の特徴に近い単行本を収集の対象とする。よって、定期刊行物及び単篇の論文はその収録範囲外とする¹¹⁾。

第 2 に、「文化論」というテーマのもとで、作者が台湾出身であることとする。つまり、

1. 中国語に翻訳され台湾で出版されている外国人作家の著作は含まない。たとえば「菊と刀」は、台湾における「日本文化論」のベストセラーであるが、台湾からの観点を代表しているとは言えない。
2. 中国語による著作であり、かつ台湾にて出版されたものであっても、著者が台湾出身者でないもの、または執筆当時国籍が台湾籍ではなく、かつ初版が台湾ではない著作は、収録しない。例えば、卓南生、周佳榮、王家驛、樊和平、石曉軍¹²⁾の論著は台湾でも出版されているが、台湾社会経験を背景にした「文化論」ではないので収録しない。
3. 作者は戦前の中国大陆出身者でも、戦後台湾に渡り、台湾社会で何らかの職を持ち生活の基盤を置き、台湾で著作を出版した者は収録する。
4. 著作は中国語でなくとも、台湾出身者によって日本語で書かれたものは、自費出版を含めて他国にて出版されたものであっても、文献目録に収録する。

第 3 の基準として、書籍の読者対象として一般大衆を設定してあるものを対象とする。

11) 単篇論文目録については、川島真 2003 がある。

12) 卓南生、シンガポール人、「日本の政治鬥爭」(1988、故郷出版公司)。周佳榮、香港人、「近代日本文化與思想」(1994、台灣商務印書館)。王家驛、中国人「儒家思想与日本文化」(1990、淑馨出版社)。樊和平、中国人、「儒学與日本模式」(1995、五南図書)。石曉軍、中国人、「中日兩國相互認識的變遷」(1992、台灣商務印書館)。

学術的論証と知識の増大を目的とした専門書は、「日本研究」の優れた著作であるが、「文化論」とは多少差異があるため収録はしない。確かにこの両者はお互いに重なり合うことがある。周知のとおりベネディクト、中根千枝或いは土居健郎による「日本文化論」の規範とでも言うべき著作は、学術的論証に根ざすだけではなく、一般大衆にも広く受け入れられているが、台湾自身にはこの種の作者はあまり見当たらない。台湾には各学術の分野に根ざした「日本研究」はあるが、「日本文化論」との関係は別の課題であり、ここでは論じない。

上述した三つの選択基準にしたがい選別した結果、本文で取り扱う文献の種類は、以下の四種類にまとめることができる。

2. 文献 (1)：廣汎なる「文化論」

以下第2次世界大戦終戦後、台湾において出版された日本の社会文化をテーマにした単行本を年代別に列挙する。この種の文献は、上述した「文化論」の特徴を帶び、自己の集団と他者日本との違いを強く意識し、また内容が広範囲にわたっているため、廣汎なる「文化論」と名づけることにする。

1947	朱雲影	『日本改造論』	台北：台灣書店
1951	王沿津	『日本帰來』	台北：經濟時報
1954	陳天鵠	『日本現勢』	台北：中華文化出版事業委員會
1955	柳長勛	『黎明日本』	台北：中華文化出版事業委員會
1966	崔万秋	『東京見聞記』	台北：皇冠出版社
1966	張深切	『縱談日本』	台北：泰山出版社
1970	司馬桑敦	『從日本到台灣』	台北：雲天出版社
1975	蘇振申	『日本紀聞』	台北：名山出版社
1980	張群	『我与日本七十年』	台北：財團法人中日關係研究会
1981	李嘉	『扶桑旧事新語』	台北：四季出版社
1981	李嘉	『蓬萊談古說今』	台北：四季出版社
1985	潘煥昆	『日本与日本人』	台北：中央日報
1987	日本文摘編	『日本解剖』	台北：故鄉出版社
1987	陳鵬仁	『紐約・東京・台北』	台北：正中書局
1987	商哲明	『台灣同胞与日本人』	台北：星光出版社
1987	齊壽	『今日東京』	台北：國際文化出版社
1988	李永熾	『從江戶到東京』	台北：合志文化事業
1988	司馬嘯青	『櫻花・武士刀：日本政要与台灣五大家族』	台北：自立晚報
1988	司馬桑敦	『中日關係二十五年』	台北：聯合報
1989	林景淵	『武士道与中国文化』	台北：錦冠出版社
1990	林景淵	『武士道与日本伝統精神』	台北：自立晚報
1991	王墨林	『後昭和的日本像』	台北縣：稻禾出版社
1991	李永熾	『日本式心靈——文化与社会散論』	台北：三民書局
1992	吳密察	『日本觀察：一個台灣的視野』	台北縣：稻禾出版社
1993	廖慶洲	『日本過台灣』	台北縣：上硯出版社
1993	章陸	『日本這個國家』	台北：三民書局
1993	陳再明	『日本論』	台北：遠流出版社

1993	謝鵬雄	『透視日本』	台北：健行文化出版社
1994	齊濤	『日本深層』	台北：三民書局
1996	廖祥雄	『日本人的這些地方很有趣』	台北：稻田出版社
1997	徐宗懋	『日本情結：從蔣介石到李登輝』	台北：天下文化出版社
1997	馬樹礼	『使日十二年』	台北：聯經出版社
1998	齊濤	『日本原形』	台北：三民書局
1998	呂理州	『解剖日本軍國主義—神話，軍國，日本』	台北：創意力文化事業
1999	章陸	『日本的政治，金錢，文化』	台北：正中書局
2001	司馬嘯青	『台灣企業家の日本経験』	台北：玉山社

著作数から見た場合、戦後半世紀以上にわたるこの種の文献は、量的にはあまり多くないと言えよう。特に、戒厳令が解除される1987年の前まで、日本文化に関わる著作物は、40年間でわずかな量であり、大部分の著作は、戒厳令解除後の十数年間に出版されたものであることがわかる。ここでは、出版事業と言論の自由が政府の検閲・統制を受けていた戒厳令下において、これらの書物がどのような「日本観」を持っていたのか検討していく必要がある。

新しい対日認識の始まりとして、終戦後台湾において日本に関して最も早く出版された本は1947年5月に、当時、政府経営の台湾書店より出版された朱雲影の著書「日本改造論」である。

執筆に至るまでの朱雲影の足跡をたどると、彼は1904年に中国江西省に生まれ、独学で江西第一師範学院に入学したという。その後、短期間ではあるが国民革命軍に入隊し北伐に参加した経験を持ち、国費奨学金を得て日本へ留学。1929～1934年に東京高等師範学校にて勉強した後、1934～1937年には京都帝国大学にて、東洋史及びアジア史を専攻する。京大での課程を修了した後、蘆溝橋事変が勃発し、中国からの留学生を引き連れ抗議活動を行った為、日本政府より強制送還されることとなった。帰国後には、教職の傍ら日本評論社・中国文化服務社の編集主幹をつとめ、1941年『日本必敗論』（重慶・中国文化服務社出版）を出版し、日本軍国主義によ

る侵略を叱責し、中国人の自尊心を大いに鼓舞した。1944～1946年には、国民政府軍事委員会において少将研究員となり、日本の情報を翻訳し蒋介石に報告する役を務めた。その後蒋介石の「対日招降書」・「抗戦勝利宣言」を日本語に翻訳し、日本と中国の被占領地区に対する空中投下にも関与した経験を持つ。以後、1946年の夏、台湾に渡り、8月から1947年5月まで台湾省行政長官公署の管轄下にある台湾省編訳館の編纂兼主任に就いた。『日本改造論』はその時期に書いたものである。

上述した書の中で、朱雲影は日本の帝国主義崩壊後に、日本の政治・経済・社会・教育など各領域の早急なる改革を提唱している。

平和的な手段を用い新しい日本を建設するということは、戦争という手段を用い日本を破壊することより遙かに困難であるかも知れない。……日本は世界平和を破壊し侵略戦争を行った元凶であり、決してある部門が暴走したのではなく、ファシズムという病に日本全体が冒され、日本全体の細胞と魂にまでその毒が及んでいるのである。よって、改造を施すに当たり、まず日本の政治・経済・社会・思想・文化各方面の病状を観察し、処方を下さねばなるまい。如何なる領域も見過ごしてはならず、如何なる病状も見過ごしてはならない。……明治時代における改造は、上から下に行われ、未だ

眞の意味での政治及び社会改革は行われてはいない、……今日改造すべきは、過去の作法を捨て、民衆の利益を第一に置いた、下から上への徹底的改造であり、平和な民主革命を発動すべきなのだ。……徹底的に日本を改造するには日本の古い指導者を排除し、彼らの欺瞞と妨害を防がなければならない。あの古い指導者——軍閥・財閥・政客・官僚は言うに及ばず、思想・文化・社会各方面の古い指導者もその内に含まれる¹³⁾。

朱雲影の主張は日本社会全体を包括しており、政治の部門において、彼は改憲を行い、議会改革、天皇制廃止の必要性を考えている。経済においては、農業改革、独占資本主義の清算を訴え、そして社会においては、身分制度の廃止、婦人解放、家庭における男尊女卑や長男繼承制度の改革を訴え、最後に教育文化関係において、天皇崇拜からの解放（教育勅語の廃止）、歴史教科書の改編並びに宗教の革新に関し、国家神道と仏教の分離を唱えるなど、実にさまざまな方面にわたった。

同書より読み取り得る文脈からもわかるように、戦勝国の立場に則した中華民国の観点を代表したものである。言うなれば、敗者の文化自体には、ある種の欠陥が必然的に存在するが故に、改造を加えねばならないというスタンスである。また、日本文化と中国文化の関係については、朱はこう述べている。

一衣帶水の国である日本と中国の歴史的関係は約二千年にわたる。中国がすでに燐爛たる文化の光を放っていた頃、日本ではまだ草木深き未開の時代であった。日本の文化的な制度はすべて中国を模倣したものである。中国は日本文化の母であり、日本は中国の乳を吸うことの

みによって成長したと言えよう。このような鉄のような確固たる事実を何人も否定することはできない。……しかし真に不幸なことに、日本は明治維新後、少しばかりの西洋文明を吸収し、恩義を忘れ、中国を軽蔑し始めたのだ。

そして、日本が中国を軽蔑し始めたため、中国侵略への道を歩んだのだと朱は結び付ける。そういう観点は、戦後になって生じたものではなく、彼が日中戦争の時期から持ち続いているものである。この書を執筆した1947年ごろ、日本においてはすでに改革が始まっていたのだが、古い指導者がなお改革を率いる事に対し、朱雲影は極めて不満と焦りを感じ、書の末尾にはこう結んでいる。

我ら中華民族は帝国主義の旧日本を不眞面目の敵としてむろん恨みを持っているが、しかし、日本の人民が民主と平和で築く新日本を建設するならば、我らは惜しみなく友誼の手を差し伸べよう。我々はこの重大な歴史的な転換期に、日本人が優柔不断にして、自分の運命を反動分子に差し渡さないことを願う。今こそ立ち上がり民主と平和の理想に基づき、腐敗した日本を改造し新しい国家を築き上げ、中国をリーダーとして率いる東アジアの平和秩序のもとで、共に幸福な生活を経営していければ、この大戦の犠牲は決して無意味ではないのだ¹⁴⁾。

そのなかで、「不眞面目の敵」である日本という見方も、彼の大陸時期に日本により侵略された経験から生まれた観点であり、この用語は日中戦争の時期にすでに大陸でよく使われていた。当時台湾にきた中国の知識人も引き続き使っている。しかし、果たして台湾で受け入れられたか否かは別問題である。

13) 朱雲影 1947 : 1-5。

14) Ibid : 85。

『日本改造論』は、出版元である台湾書店の「光復文庫」の第5集として編入された。同書が当時、どれだけの読者に読まれ、どれだけの影響力を持っていたのか今となっては知るよしもない。なぜなら、戦後間もない台湾において、慣れない中国語（北京語）による本省人の読解能力を考えると、書物自体を読み通せる本省人は決して多くはなかったと思われる。また、その頃はちょうど二二八事件が発生した後の時期にあたり、社会的雰囲気は非常に厳しいものであった。但し、唯一市場で出版できる日本に関する書籍として、しかも、国府の文化政策を忠実に執行するための台湾書店からの出版物として、政治的な代表性はかなりあるといえよう。こうした朱雲影の著作に代表される戦勝国の立場に立って日本を改造しようという自負心、そして、「不俱戴天の敵」に対する侵略される者としての「日本觀」は、植民支配から解放されたばかりの台湾にとって、未曾有の観点となつたであろう。

朱雲影はその後、1947年6月より学術界へ再度身を投じ、現在の台湾国立師範大学の前身である台湾省立師範学院史地学科の教授に就任している。1962年以後、朱は初代の歴史学科主任に就任した。当時の研究として代表されるものは『中国文化の日本・韓国・ベトナムに対する影響』という著書がある。同書は上述した中国文化は日本文化の母であるという論点の延長であった¹⁵⁾。

この本が出版された後、1949年まで200万人に近い大陸からの軍人および軍属、難民が入ってきて、台湾社会の住民の構成を大きく変えた。そして、49年戒厳令が敷かれ、50年代は白色テロといわれる思想統制の時代を経て、1987年戒厳令が解除されるまで、日本文化を広く論評し日本をテーマにした単行本は量的に極めて少なかった。

また、上述の文献目録からは、ある明確な

現象が見て取れる。その時期に単行本を出した執筆者の出身について言えば、皆1945年以降、大陸から移入してきた人々、いわば外省人ばかりであった。そして、内容的にみれば、専門的に論を立てることはなく、ほとんどが見聞記およびエッセイ風のようなものであった。それは、書き手の職業とも関係しているが、それを整理してみると、以下のようである。

1. 外交官、軍人

- ・駐日外交官；崔萬秋、陳天鵠、張群。
- ・軍人；柳長勛。

2. 新聞記者

- ・経済時報社記者；王沿津。
- ・中央日報社記者；潘煥昆。
- ・中央通訊社記者；李嘉。
- ・聯合報駐日記者；司馬桑敦。

作者の業種は作品の内容を左右する。駐日外交官は往々にして回顧録やまわりの社会人情を記し、一方、記者はふだん取材をし見聞いた蓄積から1冊の本にまとめている。そのため、内容も様々で、概論や散論的なものが多い。これらの著作は長期に亘り、台湾の「日本文化論」のマーケットを主導していたのである。

そして、すでに前述した被侵略者の角度から見た「日本觀」もまだ引き続き存在する。代表例として、政府を代表する中央日報社（国民党の機関紙）の駐日記者潘煥昆が『日本与日本人』で心情を吐露した例がある。

一二八淞滬戦が発生した当時、私はちょうど広東省汕頭市で中学校に通っていた。私たちの学校は日本領事館のすぐそばにあり、その後ろ一キロにも満たない港には日本の駆逐艦が二艘停泊していた。白昼には水兵達が領事館の裏庭で取

15) 朱雲影は1978年退職後渡米し、1995年に死去。『朱雲影教授逝世週年紀念』1996、台北：師範大學歴史學系歴史研究所を参照。

つ組み合いで練習をしており、殺気に満ちていた。夜になると日本の軍艦から機関銃を掃射する響きが、夜中鳴り響きっぱなしであった。あの日本人の醜い顔と気勢の激しい傲慢な態度は今なお私の脳裏に焼き付いている。その後八年間の抗戦期間の日本の戦闘機からの爆撃、またこの目で見た同胞の悲惨な光景と苦しみは、言うにも及ばない。

今思い起こせば、仮に日本が我が国を侵略しなければ、我らの政府は統一と建国の大業を成し遂げ、共産主義は既に我が国から消滅していた。我らは何ゆえ大陸も敵に占領され、今ではこの台湾・澎湖島・金門・馬祖この小さな土地のみとなとなってしまったのだろう。大陸にいる七億の同胞の苦難と自由地区の我々の不幸な処遇は、すべて日本が作り出したものであり、日本人は直接手を加えていないなどと言ってその咎から逃れようすることは許されない¹⁶⁾。

この種の「被侵略者」の持つ恨みの意識は、もちろん人によって異なる。例えば当時のGHQの中華民国駐日軍事代表団の代表で軍人出身の柳長助は日本文化の素養が高く、戦争を見つめる目線は極めて冷静であった。また王沿津や崔萬秋の見聞記の主な内容は、日本社会の高度成長ぶりを注目していた。いずれも数すくない台湾の書籍市場で日本の状況を伝える書物であったが、なぜか書き手の記者や外交官は皆外省人であった。

そのなかで、ただ唯一本省人（1945年以前より台湾に住んでいた人々）の執筆した日本社会文化の書籍がみられた。この暗黙のルールが破られたのように1966年、ようやく本省人出身の張深切による日本の社会文化の書『縦談日本』が出版された。

張深切は1904年台湾の南投に生まれ、1917

年に日本に赴き、小、中学の教育を受け、20歳のとき大学在学中、上海へ渡った。その後、大陸および台湾を往来し演劇や小説などの文芸活動を従事する傍ら、日本の植民統治に反抗した台湾人の政治運動に関わり、2度入獄した。この本は作者自身の当時の書下ろしではなく、作者によれば、出版時より20数年前に書いてあった原稿をもとに出版したものであるという。1965年1月張深切臨終の前、序言を書き終え、彼の死後遺稿の形で、友人の洪尊元の手によってその整理出版が行われた。なぜこの本を出版したのか、洪尊元はその理由を本の前書きでこう述ている。

日本に関心のある全ての読者にとって、『縦談日本』は必読の価値ある書である。この書は台湾籍の作者により執筆された書である。目下の国内のいわゆる「日本通」よりも優れた洞察力に富む書であるとは完全には保証できなくても、この本は相当な「分量」をもち備えていることは間違いない。更に付け加えれば、本来「日本通」というものを台湾の同胞の中から探し出すというのは、ごく簡単なことであったはずである。しかし、いま空前の国難の時期に迎えているにもかかわらず、このことは世間の風当たりが強く当局より十分な重視を得られておらず、余計な一言かも知れぬが、遺憾でならない。……

（中略）

「精神力」とはなんと神秘的な力だろう。張深切氏の遺著『縦談日本』の書に関する、もう一度作者の紹介をすると、彼は台湾籍の作家であり、そして現在台湾同胞の精神力は貧弱に陥っている。彼は数少ない日本文化を受け入れた者であると共に、祖国の文化を受け入れた人物でもある。旧世代は日本に私淑し、新世

16) 潘煥昆 1985 : 6。

代は米国に私淑するという断層がある中で、正真正銘の中国文化は、台湾同胞の間には未だ根付いていない。よって、目下必要なのは、深く中国文化を理解する台湾籍作家であり、台湾における精神の世界に少しでも貢献しうる力なのである¹⁷⁾。

すなわち、前文のなかで台湾籍という表現をとっている本省人の作品は、ある明白な目的のもとでしか、出版できなかったということであるが、このことは極めて意味深長な意義が含まれていると言えるだろう。この本全体を通じて、張切深の立場は一貫して自己を「中国人」の立場に置いている。張自身の書いた序言では、まずその立場を表明している。

日本が今アジアの全ての場所に置いて非常に重要な地位を得ている。我々は日本の実情を認識してこそ、彼らと親善を結ぶことができるのである。また日本自身も過去の觀念を変え、中国の國体を認識する必要がある。つまりは、如何に変わっていこうとも、中国民族は依然として全世界で最も優秀な大族である。一旦復興に目覚めたならば、中国のみがこの世界の平和を維持し、人類を大同の道へ導くということを悟るのである。……。本編は筆者の二十数年前の古い原稿である。一部の内容が現在の実情に合わないほかは、さほど変化はみられない。本来、このような腐りきった原稿をゴミ箱に捨てようと思ったのだが、目下の時局によって救い上げられた。少し修正を加え、世に出した¹⁸⁾。

1966年代の時局とはどういうものであつ

たが、書のなかには敢えて説明はしていない。しかし、同書は日本の精神文明、風俗人情を浅く広く紹介しているなか、1箇所だけ、張深切の本省人に対する同情と弁解を記した言葉を見つけることができた。

この道徳的に退廃する世相の中で、日本人には今もなお師を愛おしむ美德が残っているというと言うことを実感する。近年聞いたところによると、かつて台湾で教師をしていた者が台湾観光に来た際、当時の生徒たちによる熱烈な歓迎をされた。しかしそのことが、某方面に反感を抱かせ、ある者はそれらの歓迎した者たちを奴隸根性が抜けていない、賊を父と尊ぶのかと非難し、某機関は公然と憤慨し、彼らの観光まで拒否する、という恥をさらした。昔の生徒たちが仮に勝利者に対し肩をすくめて追従笑いし、こびへつらうのであれば、それは正に恥であるが、しかし彼らは敗戦国から来た師に対し、彼ら個人が受けた恩恵に対し感謝の意を表したのである。この人情味にあふれる行いに対し、称賛すべきであるのにどうして悪罵を浴びせることができようか？¹⁹⁾

こうして、上述の文章から張深切が「勝利者」と「敗戦者」に対し明確な区別を持ってはいるが、むかしの植民者である教師と植民される者、すなわち生徒との関係については、決して戦勝や敗戦への意識から影響を受けるべきではないと考えていることが理解される。このような考えは文中に出てくる「某方面」の人には理解できないものであると暗示している。しかし張深切がはっきり言い出せなかった「某方面」は一体何を指し、誰のことであったのか。ここに張深切が当時言い

17) 張深切 1966: 1, 3。

18) 陳芳明ほか編 1998: 67。

19) 張深切 1966: 35。

表せなかつたという困難があつたことが伝わつてくる。

『縦談日本』は主に日本の社会文化を紹介しており、文学や戯曲、宗教、民俗などを奥深く且つ平易な文章で多くの読者に紹介しているが、著者が如何に高度に日本を理解しているかが見て取れる。彼の死後この書は出版されたわけだが、興味深いことに、書の付録に彼が亡くなった後、多くの外省系文化界の人々の追悼文が記されている。こうした追悼文の中で、彼の反日経験が強調され、ある聯合報記者の目から見た張深切は人々を感心させるほど「日本をとことんまで恨んで」いた。このことは、張深切は本省人作家でありながらも、特殊な位置にあり、彼の友人は外省人の作家が多く、彼らから深い信頼を得ていたことを示している。

戒厳令が解除された後、同書は新たに復刻版として出版されたのだが、これに対し、研究者張炎憲は解説している。

張深切はこの書を執筆している時、時には自己を中国人と認め、中国人的口調で日本を描くが、両国比較となると、知らず知らずに台湾人の観点から書いてしまう。それはまさしく、日本にも属せず、また、中国にも属しない、第三者の立場である。自己のアイデンティティーに悩むのは、台湾人としての悲哀であり、張深切もまた、その宿命からは逃れなかつた²⁰⁾。

張炎憲は、このように彼を解説するが、筆者はそうは思えない。むしろ、張深切は、自己のアイデンティティーへのジレンマに陥っていたのではなく、表現上のジレンマに陥っていたと考えるのである。表現上のジレンマとは、戦後の台湾本省人における共通の現象である。すなわち、張深切は戦後初期に本省

籍の人々が日本の恩師を迎えることに対して当局から「奴隸根性の抜けない」との批判を受けていたことを、重く心の中で捉えていたのではないかということである。これらの罵倒に対して、張深切は、恩師を歓迎することも「人情味にあふれる行い」だと同情を示したが、反論することはできなかつたのだろう。

一方で、いわゆる本省人作家の「日本文化論」作品が再び登場するのは、張深切の著作出版から約20年を経た戒厳令解除後の1987年となるが、その中でも、特に商哲明はかつての被植民者がポストコロニアル期に生きる文化人ではなく、一般大衆の観点を提供してくれる。商哲明は、1929年生まれで、中学時代まで日本教育を受けてきた。戦後も21年間教員として、教壇に立つた。教師時代には特別な反日感情は抱かず、逆に崇拜する傾向さえあつた。その後、転職し、日本人向けのツアーガイドとなる。彼は、ガイド業を通して、新たに日本人と接触していく過程にて、日本人に対しネガティブな印象を覚えていく。そのネガティブな印象の累積が、彼のナショナリズムを駆り立て、「懺悔」と題して複雑に変わり行く自己の複雑な心情を『台湾同胞与日本人』という書物の中に記している。

私は以前盲目に日本人を崇拜し、良く日本語を話し、日本の歌を聴き、日本の歌謡曲を歌つた。なんと恥知らずなのだろう。私の歌つた日本の歌、日本の流行歌、日本の軍歌、今思い起こすと、赤面の思いである。……教師として教壇に立つた21年、始めの10年は、日本の模範教師の如く、厳しく生徒を叱り、生徒を殴つた。なんと酷いことをしたのだろう²¹⁾。

20) 陳芳明ほか編 1998: 231。

21) 商哲明 1987: 2。

ある日、彼の友人は、彼に問う、なぜ日本を尊敬しなくなったのかと？すると、彼は「民族としての誇りに目覚めたのだ」と答え、被植民時期の屈辱を引き合いに出す。

日本人は台湾人を罵るときにチャンコロと言う。殴るときもチャンコロと口走る。たったこれだけを取ってみても、昔日本人は、台湾人を虐めに虐めた。これは、もう個人的な問題ではないんだよ²²⁾。

もともと彼の脳の奥底に眠っていた記憶が、戦後の不愉快な日本人との接触経験から呼び起されたが、しかし最後には彼は日本人を全面的に否定しているわけでもない。バランスの取れた結論で結んでいる。

私は日本語ガイドとして台湾で日本人と接触する。日本でも日本人と会う。彼らからは、学ぶべきところもあるし、また、見習うに値しないところもある。

日本人は公徳心を持ち、法を順守し、規律を守り、相手を気遣い、相手の立場になって考える。そして、勤勉で責任感があり、親切で礼儀正しい。一学ぶべき所だ。

日本人は横暴で、意地なし、性格は悪く、表情は能面のよう、気分屋で、曖昧、裏と表がある。虚偽で、頭は固い……。一見習うべきではない²³⁾。

同書の出版時代はちょうど戒厳令が解かれた年であった。戒厳令自体は日本に関する中国語の書籍を禁止するわけではないが、しかし、思想の検閲体制がなお敷かれており文献リストを見てみると、やはり戒厳令が解かれたのち明らかに出版量が増加している。また内容的にもバラエティの富んだ日本論が生ま

れはじめたといえる。しかし、商哲明のような自己の経験に照らし合わせた日本観の著作は、上掲の文献リストのなかでも、わずかである。作者の職業を整理してみると、以下のように、やはり、外省人出身の新聞記者の書いたものが多くみられた。

- ・中央日報駐日特派員：齊濤。
- ・中華日報編集局長、駐日特派員：章陸。
- ・中国時報記者：徐宗懋。
- ・経済日報社：司馬嘯青

そのなかで、司馬嘯青のみ本省人であり、また海外駐在の経験をもたないが、彼の関心は日台の経済界の交流の話であった。齊濤と章陸の著書は前の時代の見聞記よりも日本文化に対する理解の程度が高いものであったが、侵略や戦争責任の報道になると目が厳しい。そして、張深切の指し示す、戦勝者が台湾人に對して非難する「奴隸根性の抜けない」との指摘は、戒厳令解除後なおも再生産される。外省人の若い世代も、先代を踏襲し、外省人が抱く「被侵略者の日本観」から、日本社会、そして台湾社会、即ち被植民者への批判を綴り続けている。代表的な作者として徐宗懋の『日本情結』（日本コンプレックス）を見てみよう。

彼らは必ずしも自己を日本人と見なしているわけではない。日本の差別政策は始終彼らと日本人の間に一本の線を引いてきた。しかし、彼らは間違なく日本文化の世界へ深く嵌り込み、またそれを生いたちにおける大切な思い出としている。そのため、彼らが祖国中国の懷に戻って挫折すると、再び日本人の懷へ戻ってしまい、挫折感が深ければ深いほど、懷で強く抱きしめられる。しかも彼らは日本の植民地支配を文化的・政治的アイデンティーにまで高め、そうして自己を被植民者の虚榮心と劣等感に陥らせる

22) Ibid: 169。

23) Ibid: 169。

ことになる。彼らの本質は必然的に軟弱なのだ²⁴⁾。

本書での徐宗懋の批判の矛先は前總統李登輝に向けられる。徐は言うなれば台湾社会の「被植民者」に対する批判として、戦後初期によく使われていた「奴隸根性」を「虚栄心と劣等感」という言葉に置き換えた。また、彼らが軟弱であることを指摘するのは、戦後初期に「被植民者」を軽蔑していたのと同じような視点から見ているからである。

そのような外省人第2世代は、戒厳令が解除されたあと、日本に3年間留学した経験をももっていても、「侵略される者」としての日本観から抜け出ることはできない。例えば、王墨林もその一例である。

私はこの島に生まれた「外省人」の第2世代だ。台南のある日本家屋で生まれ、また嘉義のもう一軒の日本家屋で育った。私にとって、故郷即ち父祖の地とは象徴的な空間に過ぎず、日本式家屋の空間が私の身体記憶の原点なのである。

.....

今となりやっとわかったことだが、両親がわたしたち子供に生まれ故郷の話を決して語らなかったのは、白色テロの中、外省人にとってタブーであったからだが、それでも両親はたまに「日本鬼子」の話をし始めると、ものすごい剣幕で不平を吐露した。高校時代、学校で「中国の怒り」という中日抗日戦争のドキュメントフィルムを見たとき、日本兵が中国の人民を虐殺する画面を見てしばらくは驚きと怖さが収まらなかった。私がかつて感動していた美しさと私の憎む暴力が、実は同じもののなかに共存していたのだ！²⁵⁾

彼が外省人で日本家屋に住んだというのは、終戦後、日本人が全員引き上げたのち残った宿舎や民家が接収され、ちょうどその後、大量に流れ込んだ外省人軍属や難民の住居に充当されたからである。このような空間感覚は外省人第2世代に共通する経験であって、よく文学作品にててくる。また彼は、『後昭和的日本像』という書のなかで映画評論を通して日本の軍国主義の復活や日本の経済的侵略にたいへん警戒感をもっていた。

上述したように、戒厳令解除後も日本論の著者には外省人が多かったものの、それでもそれ以前と比べると本省人作家が多く出て来るようになった。しかし、彼らは、植民地支配を経験した世代ではなく、いわば植民された者の第2世代である。第2世代の本省人の扱うテーマは、たとえば、企業や経済界の話を専門的に扱う司馬嘯青（本名廖慶洲としても本を出版している）、陳再明、また武士道を扱う林景淵、呂理州などがみられる。そして歴史学者が一般読者のために執筆した「日本文化論」に関する著作も出てきた。例えば、李永熾の江戸文学に関する見解があり、呂密察が日本に滞在した数年間中に得た専門知識をもとに、日本社会の「保守化」問題を取り扱ったり、戦後日本の平和運動や市民運動に対する考察など、これらの書籍は、台湾社会が日本に対する知識と現状への理解を促進するために執筆されたものである。また、呂密察は著書の中で、本人は本省人の第2世代であることを強調することはないが、「被侵略者としての日本観」に対する批判を行っている。

被害者意識から出発する「抗戦期の心理状態」や心理的な分析を経ない民族的・感情は、現代国際社会においては言うに及ばず、日本に対しても正確な理解を得られない。我々の期待していた、理性的

24) Ibid: 169.

25) 王墨林 1991: 283-284。

な分析を行うはずのいわゆる「日本専門家」が、いまなおまるで抗戦用宣伝文かの如く「作文」している。それを見て、悲壯かつ哀れにさえ思うのである。私たちは、国際社会（もちろん日本を含む）に対し、被害者意識を全面に押し出し高台から相手を見下ろした様な態度ではなく、正々堂々と毅然とした態度で相手に向かい合う尊厳と自信が必要なのである²⁶⁾。

「日本軍国主義」が復活するか否かというテーマの下、呂理州、吳密察のような本省人第2世代は、戦後の日本社会についての研究の結果出した答えとして、軍国主義へ後戻りはあり得ないと結論づけるが、外省人の第2世代である王墨林、徐宗懋は、日本軍国主義はいつか必ず蘇ると断定する。両者間には著しい観点の違いがみられる。

3. 文献(2)：自伝／伝記／詩集から見る「文化論」

上述した戦後の中国語による出版物である文献(1)の目録の中には、かつて実際に日本時代に植民統治を経験し、深く日本を理解した「被植民者」の作者の存在は、殆ど皆無と言ってよいだろう。時代の風潮と、政府が反日政策を前面に押し出す中、商哲明のような反植民を題材とした作品がわずか1冊出版されただけであった。しかし中国語の枠を飛び越えれば、大量の日本語によって記された作品が、戒嚴令が解除されたのち、自費出版或いは日本において出版され始めた。これらの作品は、理論的論述ではなく、主に生活史（ライフ・ヒストリー）の視点に立ち、日本と自己との関係を振返る形式を取っている。また、注目に値すべきは、これらの執筆者は、自らが日本語にて執筆を行ったことである。以下、目録を掲載する。

出版年	作 者	書 名	出 版 社
1981	磯村生得	『われに帰る祖国なく：或る台湾人軍属の記録』	東京：時事通信社
1989	張有忠	『私の愛する台湾と中国と日本』	東京：勁草書房
1992	柯旗化	『台湾監獄島』	東京：イースト・プレス
1993	楊威理	『ある台湾知識人の悲劇』	東京：岩波書店
1993	楊千鶴	『人生のプリズム』	東京：日本そうぶん社
1994	林歳徳	『私の抗日天命』	東京：社会評論出版
1994	孤蓬萬里	『「台湾万葉集」物語』	東京：岩波書店
1994	孤蓬萬里編著	『台湾万葉集』	東京：集英社
1994	陳逸松	『陳逸松回憶錄』	東京：新台灣文庫
1994	蔡德本	『台湾のいもっ子』	東京：集英社
1995	孤蓬萬里編著	『台湾万葉集（続編）』	東京：集英社
1997	林景明	『日本統治下台湾の「皇民化」教育』	東京：高文研
1997	孤蓬萬里編著	『孤蓬萬里半世紀』	東京：集英社
1998	鄭春河	『台湾人元志願兵と大東亜戦争』	東京：展転社
1999	吳月娥	『ある台湾人女性の自分史』	東京：芙蓉書房
1999	楊海瑞	『双葉』	自費出版
1999	楊國光	『ある台湾人の軌跡』	東京：露満堂

26) 吳密察 1992: 190。

2000 陳淑媛	『「憶』さるすべりによせて』	自費出版
2000 蔡焜燁	『台灣人と日本精神』	東京：日本教文社
2001 洪坤山	『闘病の日々』	台北：南天書局
2001 黃靈芝	『黃靈芝作品集（19）』	自費出版
2002 許昭榮	『知られる戦後 元日本軍・元国府軍台灣老兵の血涙物語』	自費出版
2002 林彦卿	『非情山地』	自費出版
2002 張嘉英	『愛の細道—我が九十年史』	自費出版
2003 許國雄	『台灣と日本がアジアを救う』	東京：明成社
2003 彭炳耀	『造飛機の日子—台灣少年工回顧録』	台北：新竹市政府
2003 黃靈芝	『台灣俳句歳時記』	東京：言叢社

上述の作品は大まかに分けて3種類に分類することができる。

1. 自伝：林歳徳、陳逸松、蔡徳本、林景明、鄭春河、吳月娥、蔡焜燁、洪坤山、林彦卿、張嘉英、許國雄、彭炳耀、磯村生得、楊千鶴。
2. 伝記：楊威理、楊國光。
3. 詩集：孤蓬萬里、賴天河、黃靈芝、楊海瑞、陳淑媛。

執筆者は、全員が職業作家ではないが、全ての者が、台湾の日本植民統治の経験者であり、年齢もほぼ近く、1920年より1930年生まれ、人生の黄金期である青春時代に終戦を迎え、また戦後国民党政府の統治を受けた経験を持つ者である。これらの出版物を発行した当時には、既に70歳以上と高齢を迎えていた。

彼らの人生経験は、ある者は怒濤のごとく、ある者は平淡と様々であるが、しかし彼らは恰も何かの力に押されたかのように、自ら筆を取らなければならなかつた。そういうた文献はほとんど自己の人生における日本経験、すなわち植民統治期の台湾で生じた経験を綴っている。彼らはプロの文学作家ではなく、自伝や伝記という手法を用いて、「植民する者と植民される者」の関係、或いは「植民される者」がポストコロニアル期から見た日本を作品を通じて伝えようとする、いわゆる「植民される側の日本観」を表現している。

これらの作品に見られる日本観は、内容も相当に複雑、かつ多層的である。簡略して述べれば、日本統治というプリズムにおいて、最も嫌惡する見解に立つ林歳徳から、日本統治に完全に肯定する立場を取る鄭春河まで多種多様である。彼らの記した書物は、自らの人生経験を元に執筆されているが、その中でも、後者が大多数を占め、それは、全員が戦後の国民党統治を経て、比較した後このような結論に達している。

これらの比較や反省を書に綴るのにあたり、様々な心理的糾余曲折を文学家でもない者が文字として表現するのは、生易しい作業ではなかつたであろう。更には、外部的因素として、戒厳令という状況下に白色テロに脅えながらの生活であったことを考えれば、執筆への決心は極めて重大な出来事であった。

自伝という伝達方式のほか、彼らはもう一つの伝達方法を持っていた。日本の詩歌である。彼らは日本語の詩歌を用いて、心情の変遷を語っている。かつて筆者は、文章比較を行い、いわゆる「日本語人」という語の意義をさぐつたことがある。ここでは、幾人かの被植民者から見た日本観を観察してみたい。

兵の日は反日なれど短歌を詠む今は親日の我の不思議さ（黄得龍）
天皇を神と思ひし彼の日びを空虚なりし
と我は思はず（鄭娘耀）
御名御璽に鼻をすすりし日を追へば日本

- 人たりしあが少年期（傅彩澄）
 ニッポンという愛憎に揺れるクニ（李琢玉，主題：「揺れる」）
 恩讐は御破算にして故侶日本（李琢玉，主題：「恩」）
 日の丸の酸っぱさを知る植民地（李琢玉，主題：「日の丸」）²⁷⁾

上述の詩を表す表現は、反日と親日の複合的感情とでもいるべきか、愛と憎しみ、恩と怨みが混ざり合い共存しているものである。例えば、日の丸の酸っぱさとは国旗の日の丸と日の丸弁当の梅干にかけている。このような詩は日本文化に精通したものでなければ理

解し得ない感覚を日本語にて表現している。彼らの取り巻かれた現状は、彼らの生活史という記憶が言語という壁に隔絶され、台湾では未だに重視されず、そして理解されておらず、今後さらに研究が要請されるだろう。

4. 文献（3）：日台関係を主軸とした「文化論」

本節では、前節で述べた日本語で執筆された自伝風の文献と似た部分もあるが、内容が過去のライフ・ヒストリーではなく、現在と未来の日台関係を扱うことを重点とした文献を列挙する。

李 登輝

- 1996 『これからアジア』 東京：光文社
 1999 『台湾の主張』 東京：PHP
 2000 『アジアの知略』 東京：光文社
 2001 『李登輝学校の教え』（小林よしのりと共著） 東京：小学館
 2003 『「武士道」解題』 東京：小学館

金 美齡

- 1996 『鍵は「台湾」にあり！—「日・台」新関係がアジアを変える』 東京：文芸春秋
 1997 『大中華主義はアジアを幸福にしない』 東京：草思社
 2000 『敵は中国なり—日本は台湾と同盟を結べ』 東京：光文社
 2001 『入国拒否—台湾論はなぜ焼かれたか』 東京：幻冬舎
 2001 『日本よ台湾よ一国を愛し人を愛すること』（周英明と共に著） 東京：扶桑社

黃 文雄

- 1992 『それでも日本だけが繁栄する』 東京：光文社
 1993 『日本の繁栄はもう止まらない』 東京：光文社
 1995 『大東亜共栄圏の精神』 東京：光文社
 1996 『中国人の偽善 台湾人の怨念』 東京：光文社
 1996 『脅かす中国騙される日本』 東京：光文社
 1997 『猪狗牛：中國沙猪・日本狗・台灣牛』 台北：前衛出版社
 1997 『捏造された日本史』 東京：光文社
 1998 『日本がつくったアジアの歴史—7（池田 憲彦と共に著）』 東京：総合法令出版
 1998 『日本がつくったアジアの歴史』 東京：総合法令出版
 1999 『韓国人の「反日」台湾人の「親日」—朝鮮総督府と台湾総督府』 東京：光文社
 1999 『罫に嵌った日本史』 東京：日本文芸社

27) 黄智慧 2003 を参照。

2000 『「NO」と言える台湾—孤児国家・台湾経済はなぜ強いのか?』	東京：日本文芸社
2000 『主張する台湾 迷走する日本』	東京：光文社
2000 『つけあがるな中国人 うろたえるな日本人』	東京：徳間書店
2001 『台湾は日本人がつくった』	東京：徳間書店
2001 『満州国の遺産』	東京：光文社
2001 『台日中的 21世紀』	台北：一橋出版社
2002 『近代中国は日本がつくった』	東京：光文社
2002 『日中戦争知られざる真実』	東京：光文社
2002 『中華思想の罫に嵌った日本』	東京：日本文芸社
2003 『中国が葬った歴史の新・真実』	東京：青春出版社
2003 『日本の植民地の真実』	東京：扶桑社
2003 『日本人が台湾に遺した武士道精神』	東京：徳間書店
2003 『世界を急襲する中国発 SARS の恐怖』	東京：光文社
2003 『中国「反日」の狂奔』	東京：光文社
2003 『中国人の卑劣日本人の拙劣』	東京：徳間書店
2003 『日本の植民地の真実』	東京：扶桑社
2004 『中国こそ逆に日本に謝罪すべき 9つの理由』	東京：青春出版社
2004 『中国の日本潰しが始まった』	東京：光文社
謝 雅梅	
1999 『台湾人と日本人—日本人に知ってほしいこと』	東京：総合法令出版
2000 『日本に恋した台湾人』	東京：総合法令出版
2001 『新視点「台湾人と日本人」』	東京：小学館
2002 『台湾論と日本論』	東京：総合法令出版
2002 『いま日本人に伝えたい台湾と中国のこと』	東京：総合法令出版
2003 『台湾は今日も日本晴れ！』	東京：総合法令出版

これらの文献中の作者の 4人は、出版時期が文献（2）と同様に、90年代に集中している。その内容、また著作数は驚くべきほどであるが、これは著作が日本社会における日本人読者に受け入れられた証拠といえるだろう。では、なぜ旧植民地出身者が語る日本の姿が、日本人読者に受け入れられたかというのには、以下のような論述がある。

もう一つは、「冷静な親日家」とでも言うべきの種類の人たちだ。この人たちは、日本に対し全く幻想をもっていない。戦後、日本から、何度も何度も裏切られ、失望も味わっている。

しかし、日本の悪い面も知り尽くして

いたとしても、台湾が生き残るために日本しかいないという醒めた考え方の人たちである。当然こういう考え方だから、ちょっとやそっとのことでは日本に対する考えはブレない。

この分類法からすると、李登輝氏は「冷静な親日家」に入るであろう。当然、李氏ばかりではない。実際に日台関係のため腐心している台湾人のほとんどは、この部類に入るのだと思う。

そして彼らは、決して「戦略的親日家」などではなく、あくまでも「冷静な親日家」なのである。

戦後、裏切り続けられた日本への親愛を心の奥に押さえ込みつつ、それでも日

本に期待して励ましてくれる「冷静な親日家」の台湾人たちが確実にいる。

彼らの思いになかなか答えられぬ戦後日本人の一人として、わしは忸怩たる思いに駆られざるを得ない。

李登輝氏は我々日本人に対して言葉を尽くして語りかける。我々に日本文化が有する深度と包容力を確信させ、尚且つ現在の日本にすら、その持てるものに対し賛辞を送ることをやめようとしない。

その言葉は近代化に疲れた我々日本人を鼓舞する²⁸⁾。

この様に日本の読者より「忸怩たる思い」や「その言葉は近代化に疲れた我々日本人を鼓舞する」との言を引き出すほど、読者を魅了させるのは、日本の社会や文化を高度に理解できているものでなければ、難しいだろう。

この4者とも、日本においても極めて知名度の高い作者であるが、彼らの著作は、日本で発刊された後、また台湾へ紹介され翻訳された。彼らの共通点として、植民地経験の視点より出発し、台湾、中国、日本という三つの文化集団の違い、特に日本社会の一般大衆に対して中国人と台湾人の区別を強調する。

その中でも、謝雅梅はその他の3人と異なり、日本の植民統治を直接経験したことはなく、第2世代の立場から過去を振り返り、両親の世代の言から、日本への感情、体験談を汲み取り、彼女にとって大好きな日本という視点を軸として執筆を行っている。更には、彼女自身が日本社会において得た経験論の展開は、文献(1)のような日本文化概論よりも深く日本文化を論じるという勢いさえある。

最後に、驚異的な著作数で有名な黃文雄は、アジア各国の近代史にも精通しており、読者にとって分かりやすい切り口で現代史を論評している。日本人という国籍的身分に束縛されない同氏は、往々にして日本人学者が見解を表明しづらい日韓・日中関係史のテーマを臆することなく発表している。

5. 文献(4)：流行文化論

最後に、90年代の後半以後に勃興し始めた新しい種類の「日本文化論」のアプローチ作品がある。これらの作品は台湾における日本がもたらしたテレビドラマ、アイドル、ポップス音楽、ファッションなどの「流行文化」へ焦点を当てた作品である。以下文献リストを列挙する。

1997 黒鳥麗子	『黒鳥麗子白皮書』	台北：大塊文化
1998 小葉日本台	『日劇完全享楽手冊』	台北：紅色
1998 哈日杏子	『我得了哈日症』	台北：時報出版社
1999 哈日杏子	『哈日事件記録簿』	台北：時報出版社
1999 哈日杏子	『遊學日本最好玩』	台北：平裝本出版公司
1999 阿潼	『東京鮮旅奇縁：偶像日劇場景新鮮紀実』	台北：青新
1999 許乃勝	『哈日族的天堂』	台北：探索
2000 劉黎兒	『東京・風情・男女』	台北：麦田出版社
2000 劉黎兒	『東京的情色手冊』	台北県：新新聞出版
2000 劉黎兒	『愛して』	台北：新新聞文化事業
2001 劉黎兒	『黎兒流：書写東京』	台北：新新聞文化事業
2002 劉黎兒	『好色時代：黎兒の慾望東京』	台北：麦田出版社

28) 李登輝、小林よしのり 2001: 194。

2002	劉黎児	『東京・迷糸・迷思：黎児的日本情思』	台北：麥田出版社
2002	劉黎児	『純愛大吟釀』	台北：新新聞文化出版
2002	劉黎児	『新美女主義』	台北：時報文化事業
2003	劉黎児	『新種男人』	台北：時報文化事業
2003	劉黎児	『黎児純愛俱楽部』	台北：方智出版社

上記書物のテーマを帰納的に分類すると、大きく2種類に分けることができる。まず第1に台湾の若年層における日本の流行文化大好きという「哈日（ハーリー）現象」、二つ目に日本の中高年層に焦点を置いたエロスに関するテーマである。

台湾の若年層における哈日現象とは、哈日杏子の著作の中から「哈日」という彼女が創り出した新しいボキャブラリーである。この言葉が台湾の若者の日本に対する好意的な感情を表し、今日では、日本、台湾の読者のほか、東南アジアの国々へも広く伝播している。そういった「哈日」現象とはいって何なのか？彼女は著作中で、自嘲気味に哈日を一種の病気とし、その症状を以下のように述べている。

食べるものは和食、見る物は日本のドラマ、映画、日本語の本、聞くのは日本語と日本の歌謡曲、使う物は日本製、おしゃべりの話題は、日本語か日本に関係する事。ショッピングに行くなら日系デパートで、いつでもどこでも完全に日本の世界に浸っていないと苦しいの²⁹⁾。

哈日杏子は1992年に日本への旅行と遊学を開始し、その後、台湾へ日本の社会や文化を紹介するべく自ら筆を執ったという。だが、彼女が日本を好きになった原因は、決して家族や歴史に関係があるのではなく、ましてや故意にそのフリをしているのではない。その理由は、哈日傾向にある若者が、台湾に

おけるエスニシティや出身に関係無く、日本の流行文化自身に共通の共感を得たからである。

もう一つのテーマは、主に劉黎児の書く日本の中高年層におけるエロスに関してである。彼女が焦点にする「日本文化論」は、日本文化と台湾文化間において全く異なる領域にターゲットを定め、台湾の読者へ覗き気味的好奇心を与える。またそれと同時に、これらのタイプの著作は、「敵国日本」あるいは「植民宗主国日本」といった重苦しく厳肅である因襲の桎梏から抜け出し、台湾人がかつてより知ることのできなかったプライベートな領域であるエロスを描いたことによって、台湾にて多くの読者層を獲得した。しかしながら、哈日杏子の著作は、日本においても翻訳出版され、多くの反響と支持を得ているのと対照的に、劉黎児のエロスに関する書籍は、目下台湾のみの出版となり、日本社会では、未だ共感を得ていないようである。

むすびに：台湾におけるポストコロニアル期の対日觀

以上、日本の植民地支配を受けた後、台湾という地域において、また台湾出身者によって書かれた「日本文化論」の四つの文献ジャンルを扱ってきた。紙幅制限のため、第2から第4までの文献を詳しく分析することができなかったが、本稿ではとりあえず取り上げることにした。取り上げること自体によって、台湾におけるたいへん複雑な構造をもつ「日本文化論」の全貌が見えてくるので、討議のバランスを取ることができたと思われ

29) 哈日杏子 1998 を参照のこと。

る。後の3種の文献の詳しい分析はまた次の機会に譲りたいと考えているが、まずは、以下のような結論を導くことができる。

1. 上記文献(1)に見られる台湾の「日本文化論」作品から、相容れない二つの日本観が浮き上がってくる。すなわち「侵略される側の日本観」と「植民される側の日本観」の共存である。前者のスタンスは、1)侵略戦争への仇恨、そして2)日本文明を論じる際、必ず中国文明の偉大さに帰結するという2点の結論に集約される。戦争への恨みは直ちに日本の軍国主義復活に警告を発する。その一方で、誇りある中国文明の伝播を受けた日本文化に対し、同文同種という親近感も強調され、二つの見方にアンビバランスも見て取れる。しかし、彼らが背負ってきた戦争という共通した体験は、戦後の台湾において、挑戦されることなく教育文化界を牛耳り、単純なステレオタイプ的日本観を次世代へ複製し、戒厳令解除前の40年間という長期に亘り出版及び書籍の大多数を占め、かつての被植民者を「奴隸根性」「軟弱」などと批判し、その批判を戒厳令解除後に至っても今もなお続いている。

一方、植民される側としての日本観は、極めて多元的であり、植民されてきた恨みの一端から、完全に日本文化へ溶け込んだ者としての一端まで、様々である。というのも人口的な多さ（植民される側がマジョリティー）、時間的な長さ（半世紀以上）、地域的広がり（台湾全土）などの要素によって複雑さが増すからである。しかも彼らは、その後もう一つの植民主義（国民党）に遭遇し、日本植民主義に対して、自主的に反芻（はんすう）することができず、非常に曖昧な表現となって表れる。その結果、台湾の日本からの脱植民地化では、多くは「侵略される側」が「植民される側」を代弁

- し、また一方的に代行しているものといえる。眞の「植民される側」からの脱植民地化は、大変屈折した形として現れる。
2. 台湾における植民される側の「日本文化論」は、長年に亘り中国語書籍マーケットにおいて日の光を浴びること事がなかった。1990年以後、長い沈黙を破り、自費出版として日本語により執筆された出版物が多数出てきた。これは、世界史的に見てもその他の被植民地でもあまり例のない出来事である。すなわち、遠い昔の旧植民地の日本語をふたたび用い、対話する相手は存在しないけれども、ただひたすら自分史を語る。平均年齢は80歳を超す古老達ではあるが、その視点は高く、成熟度を見せており、今後とも更なる学術的眼差しが要請されるだろう。
3. 植民地主義が終焉してすでに半世紀を経た台湾は、如何に日本と再び付き合っていくべきか？これは日台関係の発展における重要な課題であろう。台湾内部でも意見の相違が見られ合意に至らない課題もあるが、その中で文献(3)の種類は新たな視野とアプローチを提供してくれた。過去にはあり得なかったこの種の文献タイプは、植民される側ならではの利点を生かし、植民主の脆さを指摘する一方、また、植民主の発展のあり方に深く寄与する。世界その他の地域におけるポストコロニアル批判に見られる、例えば、ファノン、サイード、スピヴァック、パパのような英語世界のポストコロニアル批判の巨匠は、皆旧植民地出身の者であることが共通している。
4. 同様に1990年代以後、台湾にて生まれた日本流行文化論は、日本文化への親近度の高さを示している。90年代以降の日本流行文化論は、過去の土壤とは違うところからうまれた。そして、今後、日本の大衆文化が台湾で受け入れられていく

ためには、台湾社会に深く根を下ろしていく必要がある。しかし、極力過去と訣別する姿勢も台湾の脱植民地化のプロセスに必要であるかもしれない。

参考文献

- ペフ・ハルミ 1987 『イデオロギーとしての日本文化』、東京：思想の科学社。
- ジョンソン・シーラ 鈴木健次訳 1986 『アメリカ人の日本観』、東京：サイマル出版会。
- 青木 保 1990 『「日本文化論」の変容』、東京：中央公論社。
- 大久保喬樹 2003 『日本文化の系譜』、東京：中公新書。
- 川島 真 2003 『台湾における日本研究』、東京：交流協会。
- 黄 福慶 1980 「論中国人的日本觀」、『中央研究院近代史研究所集刊』9：61-78、台北：中央研究院近代史研究所。

- 黄 智慧 2003 「ポストコロニアル都市の悲情——台北の日本語文芸活動について」、橋爪紳也編『アジア都市文化学の可能性』、pp.115-146、大阪：清文堂。
- 崔 吉城 2002 『「親日」と「反日」の文化人類学』、東京：明石書店。
- 酒井 亨 2004 『哈日族』、東京：光文社。
- 杉本良夫・ロス マオア 1992 『日本人は「日本的」か』、東京：窓社。
- 陳 芳明ほか編 1998 『張深切全集』6:228-231、台北：文經社。
- 南 博 1994 『日本人論—明治から今日まで』、東京：岩波書店。
- 村上勝敏 1997 『外国人による戦後日本論』、東京：窓社。
- 吉野耕作 1997 『文化ナショナリズムの社会学』、名古屋：名古屋大学出版会。
- 林 明徳 1980 「中国人的日本觀」、『大学雑誌』131：30-37、台北：大学雑誌社。